

# ヘイト・スピーチと街空間 —横浜中華街／新大久保コリアンタウン／池袋チャイナタウン—

HS25-0070J 米田みのり

## 1. はじめに

グローバル化が進む中、外国人の存在は私たちにとって身近になりつつある。その一方で、日本では繰り返されるヘイトスピーチが近年激化したことによって注目を集め、社会問題になっている。2016年にヘイト・スピーチ対策法案が成立、施行された後、ヘイト・スピーチの発生件数はおよそ半減したが、完全に無くなった訳ではない。またネット上でも外国人を排除しようとする発言は今も続いている。しかしグローバル化が進む中で、日本だけがその潮流に逆らって外国人を拒むことは不可能である。そのため、外国人と上手く共存していくことは、今の日本社会にとって大きな課題の一つだといえる。

筆者は2年次に受講した社会調査実習の中で、韓国入街である新大久保ではヘイト・スピーチが何度も行われたのに対し、国家間に同じような領土問題、歴史認識問題を抱えている中国人街・横浜中華街では、なぜヘイト・スピーチが起こらないのか疑問に思った。また同実習ではじめて新大久保を訪れた際、看板などにハングル表記があるものの、景観にコリアンタウンらしい特徴が無い事に気が付いた。一方で横浜中華街は、建物や看板の色使いなど、視覚から入る情報だけでその場所が日本ではない錯覚に陥る。街のオーセンティシティ(その街らしさ)がヘイト・スピーチを起こす主な原因になるとは思わないが、新大久保コリアンタウンと横浜中華街のその街らしさの違いは、新大久保ではヘイト・スピーチが頻繁に起こり、横浜中華街ではヘイト・スピーチが起こらなかった一つの要素になったのではないかと考えた。街のオーセンティシティはその街で起こる出来事に影響を与えることがあるのではないかと考えた。

そこで本論では、ヘイト・スピーチに焦点をあてながら、グローバル化の中での街と人の在り方について考察する。

## 2. ヘイト・スピーチの概要と現状

師岡康子の著書より、本論文ではヘイト・スピーチを人種・民族・国籍・性などの属性を有するマイノリティの集団もしくは個人に対し、その属性を理由とする差別であり、表現による暴力、攻撃、迫害と定義づけた(師岡 2013)。

ヘイト・スピーチが起こる要因としては、「経済的に不安定で不満・不安を抱えている低学歴層や不安定雇用層がその鬱憤を晴らすという形で排外主義運動を行っている」というのが定説であった。

しかし、樋口(2014)は、排外主義運動を組織する側にあるS会の関係者38名の学歴・職業・雇用形態、ヘイト・スピーチの参加者59名の学歴・職業をまとめ、「経済的に不安定で不満・不安を抱えている低学歴層や不安定雇用層」ばかりで運動が組織されていないことを提示した。

その上で「外国人との接点」、「政治的イデオロギー」の2点について活動家34名からアンケートをとり、「外国人との接点がないこと」、「イデオロギーが保守であること」が活動家に共通する背景だと示唆している。

## 3. ヘイト・スピーチと街のオーセンティシティ

横浜中華街・新大久保コリアンタウン・池袋チャイナタウンの「その街らしさ」を歴史的背景、実地調査の結果から次のようにまとめた。

横浜中華街は1859年の横浜開港から始まる長い歴史を持つ街で、平日に訪れても多くの観光客で賑わっている。1956年に店を営む有志からなる「中華街発展会協同組合」(現在は法人団体)の前身・「中華街発展会」が結成され、街のイメージアップを目的に牌楼の新設やリニューアル、路面の整備や公共トイレの設置などを行ってきた(菅原 2007)。現在は銀行やゲームセンターまでもが中国風の外装であり、日本に居ながら違う

国に居るような錯覚に陥る。

新大久保コリアンタウンは1980年代、歌舞伎町に約500ヶ所あると言われたコリアンクラブで働くホステスたちのベッドタウンだったが、1990年代初頭に台湾、タイ、マレーシアなどの飲食店や東南アジア食品を扱う食材店が増え始めた。中頃からは韓国系の店舗・事業所の勢いが増し、2002年の日韓ワールドカップを契機に東南アジアの食材店などは韓国色に塗り替えられた(稲葉 2008)。2014年の実地調査では、2003年頃に起こった韓流ブームの賑わいがなくなったように感じた。しかし2017年の実地調査では、幅広い年齢層の女性客で賑わっており、2016年のヘイトスピーチ対策法施行によって平穏を取り戻した街に人々が戻りつつあるように感じた。

池袋チャイナタウンは1978年末に始まった中国の革命開放政策以降、多くの中国人就学生を吸収した。それは池袋周辺に日本語学校・飲食店のアルバイト先・駅から徒歩圏内の格安の古アパートが多くあったことが要因であった。1991年に池袋北口にできた中国スーパーの知音は、それまで中国食材の入手が困難だった華僑たちをひきつける集客の核となり、それに伴い北口には華僑向けのさまざまな商売が誕生しはじめた(山下 2010)。平日夕方の池袋チャイナタウンを訪れると、人は疎らで横浜中華街や新大久保のような賑わいは感じられなかった。池袋では今でも度々ヘイト・スピーチが繰り返されており、最近では2017年9月2日に保守団体GがJR池袋駅西口にて街宣活動を行った。

#### 4. 都市と景観

ジェイン・ジェイコブズ(2010)によると、都市の安全や公共のふれあい、交錯利用を維持するのに十分な複雑性を持つためには、混合利用の中身がさまざまに多様でなくてはならない。そして都市の街路や地区に多様性を生み出すための条件として、①混合一次用途の必要性、②小さな街区の必要性、③古い建物の必要性、④密集の必要性が欠かせない。この条件はその街に人に居てもらうための条件だが、これらが街の安全に繋がるというのは、街に人がいれば、人による監視の目が働いて人為的災厄が起きにくいからである。

四条件に横浜中華街・新大久保コリアンタウン・池袋チャイナタウンを当てはめて検討すると、横浜中華街は3条件(混合一次用途・古い建物・密集)、新大久

保は2条件(混合一次用途・密集)、池袋は1条件(小さな街区)を満たす。

以上により横浜中華街は3つの街の中で最も多様性を生み出しやすいといえる。

#### 5. 考察 これからの街空間の形成

2016年にヘイトスピーチ対策法が施行されたにも関わらず、今も変わらずヘイト・スピーチによって生活を脅かされ、心を傷つけられる人がいる。街のオーセンティシティがヘイト・スピーチを防ぐ一つの要因になったとしても、本論で示した多様性を生み出す条件は簡単に実現できるものばかりではない。

また本論を執筆する中で思ったことは、ヘイト・スピーチという災厄を街単位の問題として考えるとき、その災厄を防ぐ一番のポイントとなっているのは、コミュニティの強固さではないかということだ。街でヘイト・スピーチが起こるかもしれないという時、それに対して、住んでいる人たちやその街を思う人たちがどれだけ結束してそれらを防ぐために行動出来るかが重要ではないか。

グローバル化が進む中でも、まだ外国人への理解が十分にあるとは言えない日本では、自分の大切にしたい街のために結束を強め、災厄を防ぐために行動する必要がある。

#### 参考文献(一部抜粋)

- ・樋口直人『日本型排外主義 在特会・外国人参政権・東アジア地政学』(2014)名古屋大学出版会
- ・稲葉佳子『オオクボ都市の力 多文化空間のダイナミズム』(2008)学芸出版社
- ・J. ジェイコブズ『アメリカ大都市の死と生』(2010)鹿島出版会
- ・師岡康子『ヘイト・スピーチとは何か』(2013)岩波新書
- ・S. ブーキン『都市はなぜ魂を失ったか ―ジェイコブズ後のニューヨーク論』(2013)講談社
- ・菅原一孝『横浜中華街の歩み』(2007)日本食生活学会誌 18 巻 2 号
- ・山下清海『池袋チャイナタウン 都内最大の中華街の実像に迫る』(2010)洋泉社